



『武岡鶴代』レコード(請求記号●LP3571)

## ベルリンの思い出

# 武岡鶴代

1895.9.18-1966.9.30

武岡さんは歌う目的ただそれだけで、この世に生まれて来た人であった。太陽のように明朗な心の人であった。それはそれは真当な人でありました。有馬大五郎(国立音楽大学初代学長)

染谷 周子

1号館正面入り口を入って左側の壁面に、国立音楽大学創立者たちのレリーフがある。創立者は5名。その中に女性が1名いるのをご存知ですか。名前は武岡鶴代。声楽家で創立当時は31歳。その他の創立者たちは、中館耕蔵(経営)31歳、榊原直(ピアノ)32歳、矢田部勤吉(声楽)30歳、渡邊敢(宗教学・初代校長)50歳。彼らは大正15(1926)年国立に東京高等音楽学院(現在・国立音楽大学)を創立した。中館は後年、「創立に際して、校長は学生の人間造り、先生達は音楽教育、私は経営に専心する、と各分担を決めて発足した。」と述べている。若々しい音楽学校の始まりである。

武岡鶴代は明治28(1895)年岡山県生まれ。大正8(1919)年東京音楽学校(現在:東京藝術大学)研究科を修了。声楽をネットケルレーヴェ、ペツォールドに師事する。当時の武岡の動向は、新聞の音楽欄に頻繁にでてくる。その活躍は、毎晩毎夜、舞台の晴れ着をつけない日がなかったであろうと書かれるほどである。当時大塚に住んでおり、学院へは国立駅からたった1台しかない人力車

で通っていたという。レッスンのエピソードについては、弟子の方々から厳しいの一言、涙の逸話が数々残されている。

最初に出演した学院の演奏会は、学校建設のため「国立の音楽村」(\*)を宣伝する演奏会である。大正15(1926)年7月11日「国立音楽堂新築披露大演奏会」で、曲目はトーマ作歌劇「ミニヨン」の《ポロネーズ》。当時の演奏会では、ワグナーのオペラのアリアをよく歌っている。昭和4(1929)年3月文部省在外研究員としてベルリンに留学。テレゼ・シュナーベルに師事する。当時のベルリンの音楽界はフルトヴェングラー、ヴァルター、クレンペラー、E・クライバーら伝説の指揮者が活躍していた時代。そこで約1年を過ごし昭和5(1930)年6月に帰国。同年10月14日「武岡鶴代帰朝第1回独唱会」(日本青年館)を開く。留学前とは大きく異なり、ドイツ歌曲と日本歌曲中心の演奏会である。

の結婚)ブライトコプフ・ウント・ヘルテル(請求記号●F22805)はオレンジクロスのハードカバーで、購入した書店「BOTTE & BOCK」のシールが貼ってある。この楽譜のタイトルページに青いインクで〈1929 in Berlin takeoka〉のサインがある。留学時代に購入したのであろう。戦時中、演奏会が開かれなくなった厳しい時代、学生たちにベルリンの国立歌劇場でみたオペラのステージの場面や情景を話してくれたという。

武岡鶴代は昭和41(1966)年9月に72歳で死去。国立音楽大学はその輝かしい業績と栄誉を讃え、武岡賞を制定。現在、卒業に際して優秀な成績をおさめた女子に授与されている。

### 参考資料

◆「武岡鶴代を偲んで」武岡祥二、1980(請求記号●C48-976)

◆「母校43年の歩み(1)」「くにたち Dochoikai news」17 pp. 1968(請求記号●P1247/17)

◆「国立音楽大学 演奏の80年史 東京高等音楽学院・国立音楽学校時代 1926年-1950年3月」国立音楽大学、2007(請求記号●J116-790)

(\*) 国立の音楽村:正式には国立大学町音楽村、箱根土地(株)(現在・プリンスホテル)が開発する100万坪の国立大学町の一部に音楽村をつくり、その中に学校を建てる計画であった。

●そめや かねこ ご紹介した楽譜は保存箱に入れて現状のまま保存しています。いつまでも、ベルリンの思い出が残るように。